

Textual Transition and Reception of the English *Reynard the Fox* (英語版『狐物語』の本文派生と受容)

都 地 沙 央 里

論 文 内 容 の 要 旨

作品に関わる人々は、その関わり方によって、大きく二つに分けられる。一つは、作り手として関わる人々、もう一つは、受け手として関わる人々である。作り手である著者、印刷者、出版者といった人々は、直接的に書物づくりに関与し、受け手である読者は、作り手側が受け手側を考慮に入れるときに、作品を手にする以前であっても、間接的に作品の製作に関わってくる。さらに、読者の反応は記録に明示されないとしても、重版の頻度や再版での編集方針に反映される場合があり、この点でも、読者は書物づくりに暗に関与している。それゆえに、作品それ自身は、作り手の意図や出版方針、また、読者層や読者の評価を物語るものであり、本文の精査、書物の装丁の観察、各版の異同の調査によって、作品を取り巻く、作り手と受け手の像を含んだ作品解釈が可能になる。このような観点で、本論文では、英国で親しまれてきた動物叙事詩『狐物語』(*Reynard the Fox*)の本文編集に焦点を当て、書誌学と書物文化史の観点から、1481年の初版から19世紀の版に至るまで、作品がたどった本文編集の変遷と受容の様子を明らかにした。

英語版『狐物語』の歴史は、William Caxtonが作品をフラマン語から英訳・出版した、1481年に始まる。大陸で流布していた物語は英国でも人気を博し、再版を重ねる。同作品は、英国固有の変遷をたどることになるが、その出版史は年代にしたがって、以下のように、大きく四つに分類することができる。(1) 1481年の初版から1600年のEdward Allde初版までの版、(2) 1620年のEdward Allde版から1701年のT. Ilive版までの版、(3) 1697年のW. Onley版から始まる18世紀の諸版、そして、(4) 19世紀の各版である。この中で、(3)に分類される版については、初版のCaxton版から大きく逸脱するため、本論文では調査の対象外とした。その他の版については、特に以下の事柄を明らかにした。

第1章 : Textual Editing and Derivation from Caxton (1481) to Allde (1600)

1481年から1600年までに出版された版を校合し、先行研究を補完・訂正するステマ(各版の派生関係)を提案した。先行研究を訂正する事実として、Pynson初版(1494)はCaxton初版のみに依拠するものであり、Pynsonの第2版(c. 1500)は彼自身の初版には依拠していないことを明らかにした。また、Pynson初版が、派生の主軸から逸脱したのはなぜかという、Blakeが提唱した疑問に対する答えを提示した。植字工の目移り、間違った時制、古風な語順といった特徴に見られるように、Pynson初版の組版・校正は注意深いものとはい

えない。このようなテキストの粗雑な質は、法律書の専門家で King's Printer でもあった彼の経歴に相応しいとは言えず、この粗雑さが、Pynson 自身の再版を含め、彼の版が後続する版に受け継がれなかった理由の一つと考えられる。

一方、Pynson の第 2 版では、Pynson にとっては珍しく、テキストやパラテキストにおいて改良の試みが観察でき、このことは彼の質の低い初版が、法律関係の顧客には不評であったことを物語っているのかもしれない。さらに、Pynson 第 2 版で独自に付け加えられた本文の概要は、その後続く Allde 初版に受け継がれている。それゆえに、Pynson 第 2 版は、初期印刷本期の『狐物語』において、重要な位置を占めていることが明らかにされ、さらにこのことから、Allde 初版は複数の底本に依拠する、複合テキストであるという事実を明らかにした。

第 2 章: Textual Editing and Marginal Morals in Allde's Revised Edition (1620)

1620 年に出版された、Edward Allde による改訂縮約版が、なぜ Caxton 版にとって代わる時代の標準版となったのか、その理由を考察した。若者を対象にした作法書や徒弟文学が流行するなかで、この時代の『狐物語』も新たに「モラル」を配置することによって、一層教化の要素を色濃くすることとなった。本文編集については、読者への呼びかけの削除や新語の多用によって、文体と語彙の洗練が観察され、読者の知識や挿絵に配慮した細かな書きかえも見受けられる。また、猥褻な箇所語り直しや、当時の法律に合わせた誓言の削除も観察される。

欄外教訓については、その提示の仕方は機知に富んでおり、笑いを相乗する効果をもたらしている。皮肉めいた、また、悪を肯定するような逆説的なモラルは読者の思考を刺激し、効果的に教訓を提示していると言える。また、モラル欄を配置することによって寓話 (fable) のような構成をとりながらも、同時代性や時事性をもたせることによって、動物叙事詩 (beast epic) としての装いを保っている。このような、時代に合わせた本文の書きかえ、精緻な編集、欄外教訓の巧みさが、この版の好意的な受容に寄与し、17 世紀の間、この作品に人気作としての地位を確立させた要因であると考えられる。

第 3 章: Continuations and Reception as a Trilogy of *Reynard the Fox*

17 世紀後半には『狐物語』の二つの続編が出版されたが、オリジナルの第 1 部も含めて、それらの著作権は、Edward Brewster という書籍商が、ほぼ独占的に所有していたようである。この時代の『狐物語』の現存形態として、第 1 部のみで存在するものと、新しく印刷された第 1 部に、出版年の古い第 2 部と第 3 部が付け加えられているという形態が混在しており、第 1 部が受容の点で続編に勝っていたことを物語っている。さらに、タイトルページの言葉遣いからは、第 1 部を購入する顧客に対して、売れ残った続編を勧めようとする、書籍商の販売戦略が見受けられる。複数の書誌上異なる作品を、テーマの類似性に合わせて一緒に綴じるという習慣は、写本時代以来続くものであり、そのような合冊本は、'Sammelband' や 'tract volume' と呼ばれている。この章で扱った『狐物語』の現存形態は、17 世紀の英国の出版業界に出現した「著作権保有書籍販売人」('copy-owning bookseller') が、

印刷者と連携して、自身の在庫を減らすために長く続く合冊の習慣を利用した、興味深い例と言える。

第4章: Textual Editing and Reception of *Reynard the Fox* in the Nineteenth Century

19世紀の『狐物語』の本文編集に影響を与えたのは、上品さを重んじる社会的思潮と、読者大衆の誕生という文化的状況であった。19世紀の「中世主義」の風潮の中で、先行する18世紀の版ではなく、時代を遡って Caxton 版や Alde 版に依拠する版が再び読み直されるようになったが、上品さを重んじて作品を改竄する‘bowdlerization’の風潮にあわせて、『狐物語』も大きく編集されることとなった。その改竄のされ方はさまざまであり、読者層の拡大によって社会の多様な層の読者が見込まれるようになったため、編集基準を異にする多様な版が生まれることとなった。本章では、猥褻な箇所がどのように削除・編集されているか、主だった版を例に取り上げてその編集の差異を明らかにし、さまざまな読者を見込んだテキストの多様性が、いかに『狐物語』の再熟を可能にしたかを明らかにした。